

楊枝店

み袋は、今に女の用ること替ることなし、其後、三徳といふものはやり、今なほ是を用はながみさしも、色々工夫し、中に一ツ浅き口を付、楊枝などを入、是を田沼懸と云り、

〔人倫訓蒙圖彙〕^五楊枝師 粟田口の猿屋は、玉串村の者なるによりて、其名高し、猿屋楊枝といふ

いはれ、からの猿は、齒あかくかほ白し、日本の猿は、齒まろきゆるゑに、楊枝の看板たり、

〔嬉遊笑覽〕^二商人世帯形氣^二楊枝屋の看板のさる見るやうに守つてゐてなど云り、

〔男色大鑑〕^七袖も通さぬ形見の衣

猿に袴を着て看板出し、夷橋筋に根本浮世枝楊とて、芝居若衆の定紋をうちつけ置しに、^〇世に又世をわたる業程悲しきはなし、道頓堀の眞齋橋に人形屋の新六といへる人、手細工に師子笛或ひは張貫の虎、またはふんどしなしの赤鬼、太鼓もたぬ安神鳴、これみな童子たらしの様に拵へて、年中丹波通ひして、そのもどりに竹の皮荒布に肩替て、まづかなる心なく、元日より大晦日まで、夫婦の口過ばかりに、去とはせはしく、橋一つ南へ渡れば、常芝居のあるに、つひに見た事もなし、燈臺本油の耗をなげき、始末心より是なり、此人ある時道に行暮て、里遠く村雲山も時雨もよほして、風は松を噪がせて次第に淋しくなれば、やうく子安の地藏堂に立寄て、寒き一夜を臥しぬ、既に夜半と思ふ時、駒の鈴音けはしく耳驚かし、旅人かと立聞せしに、形も見えずして、御聲あらたにお地藏くと呼給ひて、今夜の産所へ見舞給はずや、丹後の切戸の文珠じやとのたまへば、戸帳のうちより、今宵は思ひよらざるとまり客あり、役々の諸神諸佛によきに心し給へといひ別れ給ひ、其夜の曉方に又文珠の聲し給ひて、今宵五畿内ばかりの平産一万二千百十六人、此内八千七十三人娘なり、中にも攝津國三津寺八幡の氏子、道頓堀の楊枝屋に願ひのまゝなる男子平産せし、^〇と先を見開きての御物語ありくと聞しに、程なく常の夜も明白み、新六地藏堂を起別れ、丹波より難波に歸りて見しに、南隣楊枝屋に日も時も違はず男子産出し